

パニウム——十九という数

偉大なる者たち：アンティオコス、コンスタンティヌス、そして最後の大統領

Jeff Pippenger

2026-03-01

ダニエル書十一章第十節から第十六節を正しく解き明かす鍵は、三十年以上前、1996年に『The Time of the End』誌が刊行された際に用いられていた基本的な預言的適用の中に見いだされる。三十年後、主は、1831年にミラー派のメッセージが公式化されたのと同様に、別の預言的メッセージが公式化されるべきことを啓示された。この三十年のオメガの歴史において、公式化されるべきメッセージは、ジョサイア・リッチに代表されるイスラムに関する先行するメッセージの修正として、またサミュエル・スノーに代表される「閉ざされた戸」についての修正されたメッセージとして表象されている。「閉ざされた戸」は、十人の乙女のたとえの象徴である。イスラムに関するメッセージが、キリストがその裁きの御業を完了されるにつれて恩寵期間の戸が段階的に閉ざされていくことについての警告を伴って、宣べ伝えられるであろう。そのメッセージは二重であり、内的ラインと外的ラインを備えている。そしてそれらは、預言の封印が解かれるときには常に生じる三段階の試練の過程の最初の二つの段階を表している。これは、2023年12月31日におけるイエス・キリストの啓示においても同様であった。

『終わりの時』誌は、1989年に終わりの時において封印が解かれたダニエル書11章の最後の六節に示されているアメリカの将来についての基本的概観を収めている。この雑誌は三十年間にわたり公的記録として存在してきたが、その主要主題が、特にウクライナにおける、カトリックの影響下にある諸教会と共産主義との宗教的闘争であったことに、誰も気づかなかった。1989年の時期におけるその宗教的闘争は、エルサレムの神殿で両者が示した叛逆においてプトレマイオスとウジャによって象徴されるプーチンの宗教的失墜の文脈を説明する。エルサレムの神殿はウジャの神殿であり、プトレマイオスの神殿ではなかった。プーチンとゼレンスキーは、同一の神殿を二つの異なる仕方でも冒瀆する。一方はエジプト人として、他方はユダヤ人として。

1989年に南の王と闘っていた教会はカトリック教会であった。そして、なぜそうではないと言えるだろうか。フランスの無神論が1798年に北の王に致命傷を負わせたのであるから、教皇制が、とりわけウクライナにおける、無神論によるカトリック教会への長期にわたる迫害に対して報復しないはずがあろうか。さらに重要なのは、ウクライナに関するこの明確な証言が、1989年の歴史について世俗の歴史家たちを引用していた1996年の刊行物に由来していることである。いまや主が第四十節の秘められていた歴史の封印を解いておられるので、主はラフィアの戦いとその余波の預言的・歴史的文脈を与えるために、二つの正教会の間の闘争を指し示しておられ、しかも、三十年前に刊行された『The Time of the End』誌に、必要な洞察をすでに織り込んでおられた。

ナポレオンの終焉は、レーニン、スターリン、ならびにソビエト連邦の体制の漸進的終焉と符合している。預言的南の王国がその首都をロシアへ移転したとき、1917年に二つの

大規模な革命が起こった。第一は、ツァーリが打倒された、いわゆるロシア革命であり、同年には続いてボルシェビキ革命が起こり、これが1917年から1922年に至る内戦へと導いた。1922年にソビエト連邦が成立した。

霊的な南の王としてのロシアの始まりは、まず内戦に至り、次いで諸国の連合の形成へと進む、二段階にわたる革命であった。ソビエト連邦の崩壊もまた二段階であり、1989年11月9日のベルリンの壁の崩壊に始まり、1991年12月31日のソビエト連邦の解体へと至った。ロシアの最後の支配者、すなわち南の王としてのウラジーミル・プーチンは、ロシアの最初の支配者であるウラジーミル・レーニンによって予表されていた。

ウラジーミルは「偉大な指導者」を意味し、プーチンは「道」を意味する。レーニンは「大いなる川」を意味するが、ウラジーミル・レーニンは本名であるウラジーミル・イリイチ・ウリヤノフを隠すために「レーニン」という名を選んだ。イリイチは「エリヤの子」を意味し、ウリヤノフは「若きエリヤの子」を意味する。

道程における偉大なロシアの指導者は、紀元前217年のラフィアの戦いによって表象される歴史において、ロシアの最初の指導者によって型示されていた。この人物はウラジーミル・レーニンとして力ある大河の大指導者であったが、自らの名を隠した。名は品性の象徴であり、ウラジーミルが自らの二つの名を隠したことは、「神はヤハウエである」を意味するエリヤによって表象される品性よりも、政治思想という大河を選び取った品性を表している。無神論の根は神の否認であり、無神論は南の王の主要な特質である。レーニンの第二および第三の名はエリヤとその子を強調しており、南の王としてのロシアの終局はプトレマイオス四世によって表象される。彼はラフィアの戦いで勝利したが、アンティオコスが紀元前200年のパニウムの戦いで戻ってきた時には、プトレマイオスの五歳の息子が統治していた。レーニンの二つの本来の名はエリヤとその子を指し示し、プトレマイオスとその子とに符合する。エリヤと彼の子らへのメッセージは「主の大いなる恐るべき日」の直前の終わりの日々に起こるが、ラフィアとパニウムの戦いもまたそこに位置づけられる。

見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は父たちの心を子どもたちに向け、子どもたちの心を父たちに向ける。わたしが来て、この地を呪いで打つことのないように。マラキ書 4章5-6節

ウジヤとプトレマイオスの証言はダニエル書11章11節において符合しており、ウジヤは反逆し、らい病にかかった後、十一年間生きた。これに対して、プトレマイオスは通算十七年間統治したが、その年数は十一節の戦いと十五節の戦いの間の年数と同じである。紀元前457年に始まった250年の予言は、これら二つの戦いの中間に当たる紀元前207年に終わった。すなわち、ラフィアの後十年、パニウムの前七年である。プトレマイオス四世の治世は紀元前221年に始まり、紀元前204年に没したので、プトレマイオスの十七年は、ラフィアからパニウムまでの十七年と同一線上のものではない。さらに、それは、西暦64年のネロに始まり313年に終わる250年の予言の結末によって示される十七年と同一でもない。313年から321年の最初の日曜令までは八年であり、その九年後の330年に、コンスタンティヌスは王国を東西に分割した。

ごく近い将来、プーチンとロシアはウクライナを撃破し、十二節に示された歴史の中で、プトレマイオスとウジヤの軌跡が繰り返され始める。聖書における二人の証人は、プーチンにとっての最後の危機を、教会と国家をめぐる危機として位置づける。その反逆はエルサレムの神殿で顕在化し、このことにより、預言的参照点はウジヤ王の神殿と宗教にあると比定される。

「緑」を意味するゼレンスキーは、欧州連合および国際連合の全球主義的官僚の傀儡であり、その全球主義的綱領は、母なる地球を崇拝する「緑」の政治運動によつて的確に体现されている。ゼレンスキーが俳優であったのも相応である。というのも、彼は明らかに他の権力の代理人にほかならず、しかも「緑」を意味するその名こそが、人類史というチェス盤上における彼の動きを導く政治哲学を指し示しているからである。ゼレンスキーに対するチェックメイトは目前に迫っている。

この最終の歴史において、ウジヤとプトレマイオスの反逆が再び繰り返られるだろう。しかし、プトレマイオス（プーチン）はパニウムの戦いの四年前に死去しており、南の王の最後の統治者は、一連の腐敗し無能な摂政らに操られる五歳の幼君によって象徴されている。

プトレマイオス5世は、紀元前204年（父プトレマイオス4世の不可解な死の後）に王位に就いたとき、わずか5～6歳にすぎなかったが、彼の治世においてプトレマイオス朝は、無能ないし腐敗した摂政政権が相次いだために麻痺状態に陥った。最初の摂政期は紀元前204年から202年にかけてであり、プトレマイオス4世の死が隠蔽され、プトレマイオス5世の母アルシノエ3世が殺害されたのちに始まった。宮廷の寵臣で、プトレマイオス4世の下で長年大臣を務めたソシビオスと、プトレマイオス4世の寵姫アガトクレアの兄アガトクレスは、自らを摂政と宣言した。彼らは、自分たちを後見人と定める遺言を偽造するか、あるいはそのような遺言を提示し、幼い王をアガトクレアとその一族の監護下に置き、潜在的な政敵を粛清した。初期の政務の多くはソシビオスが掌理した。

紀元前202年ごろに局面が転じ、アガトクレスが実権を掌握する摂政となったが、放蕩と失政のゆえに広く憎悪を買った。アレクサンドリアでの民衆蜂起により、彼は少年王の名目上の承認のもと、暴徒によって残酷な私刑に処せられた。続く摂政は、ペルシウムの総督トレポレモス、ついでアリストメネスであった。紀元前200年のパニウムの戦いの頃には、王国はこのような摂政と宮廷顧問が交替で実権を担う体制のもとにあった。

パニオンの戦いにおいて、プトレマイオス朝軍の野戦指揮を執ったのはアイトリア人の将軍スコパスであり、彼は摂政政権の下で任命された傭兵指揮官で、プトレマイオス5世自身による任命ではなかった。若き王には実質的な統制権はなく、諸決定・軍事戦略・王国全体の脆弱性は、摂政たちの機能不全、内部反乱（たとえば土着エジプト人の蜂起）、および宮廷内の陰謀に起因していた。この不安定性は、大王アンティオコス3世がパニオンでスコパスを決定的に撃破し、ユダヤを含むコイレ・シリアをプトレマイオス朝の支配から恒久的に奪取することを可能にした。

歴史家たちは、プトレマイオス四世の死因が毒殺であった可能性について論じており、この毒殺説は、ウラジーミル・レーニン、ヨシフ・スターリン、さらには南の女王クレオパトラに関する歴史的憶測の一部でもある。プーチンはウクライナ戦争において勝利を

収めるが、その後、ソビエト連邦がかつてウクライナの教会に対して有していた支配的関係を再び敷こうとする意図から、彼の没落が始まる。その支配的関係は1989年に撤廃されたが、その撤廃は、北の王の南の王に対する勝利の象徴であった。

ウクライナは東スラヴ世界における正教の揺籃である。ウラジーミル大公の受洗は988年、キーウにおいて行われた。コンスタンティノープルが陥落した後、モスクワは「第三のローマ」の称号を主張し、ウクライナをその「教会法上の管轄領域」として含むロシアのすべての地の正当な継承者にして霊的保護者として自らを位置づけた。

モスクワ総主教庁は、「一つの民族、一つの信仰」という標語を掲げ、ウクライナをロシアから霊的に不可分のものと常に見なしてきた。この標語は、プーチン自身もしばしば用いてきた表現である。ウクライナでは、特に2014年および2022年以降、モスクワによる監督は、真の霊的母性ではなく、むしろ植民地的かつ帝國的な支配として受け止められる傾向が一層強まっている。2026年2月現在、二つの相互に競合する正教会の教会体制が存在する。その一つはウクライナ正教会であり、これは2019年以降、コンスタンティノープルの全地総主教バルトロメオから独立している。キーウでは、ウクライナ正教会こそが真に国民的な教会であると見なされている。

読者は注意されたい。「Orthodox Church of Ukraine」は「Ukrainian Orthodox Church」とは異なる教会である。「Ukrainian Orthodox Church」はロシアの正教会と結び付いており、このためゼレンスキーはそれを攻撃している。すでに進行中のゼレンスキーによる攻撃に対して、バチカンも反対している。しかし、十二節のプーチンの反逆は、ラフィアでの彼の勝利に続くものであり、いまだ将来のことである。

ウクライナ正教会は、歴史的にモスクワの教会機構と結びついてきた。2022年の侵攻後、ウクライナ正教会は同年5月に完全な自治を宣言したが、ウクライナ国家の捜査機関（DESS）は、同教会が教会法上および法的に依然としてモスクワに関連していると繰り返し主張している。ウクライナは2024年8月、ロシア正教会（「侵略国家」）に結びつくいかなる宗教団体も禁止する法律を可決し、ゼレンスキーが署名した。ウクライナ正教会は、関係を完全に断つことを命じられており、従わない場合には同教会のキーウ府主教区が裁判所命令により解散されることになる。2025年末から2026年初頭にかけて、強制捜査が継続し、ウクライナ正教会への小教区の移籍（2022年以降1,300件超）、訴訟が続いており、また、ウクライナ正教会に関する信教の自由上の懸念について警鐘を鳴らす国連の専門家もいる。

バチカンは、ウクライナ正教会のいかなる強制的解散にも公に反対している。ロシアおよびプーチンは、これを教会法上の正統な正教会に対する公然たる迫害と位置づけ、いかなる和平交渉においても「ロシア正教の諸教会」の保護を明示的な要求として掲げている。ロシアのプロパガンダは、ウクライナ正教会および同教会に対するウクライナ国家の攻撃を一貫して「ナチズム」と結び付け、それを自らの「非ナチ化」正当化の一部としている。

プーチンは、僭越にも「神殿に入る」かのごとく、ウクライナ正教に対する全面的な霊的支配権を主張し、ウクライナの教会体制全体をモスクワの権威下に再び従属させようとしつつ、ロシア正教世界の正当なる霊的最高権威としての承認を要求する。

これは、プトレマイオスが至聖所に入った事態とまったく並行し、ウジャ王は香を焚こうとするゼレンスキーに相当する。プトレマイオスの反逆は至聖所で、ウジャ王のそれは聖所であった。南の王は「境界線」の勝利に気を良くし、ナチズムの代理権力に終止符を打ち、やがて分を越えて宗教の領域のみに属する場所へ踏み込む。そのとき、摂理により突如としてへりくだらされ、プーチンは舞台から姿を消すことになる（ちょうどプトレマイオス4世が紀元前204年に死んだように）。「弱い後継者の段階」という権力の空白の後、北の王はさらに大いなる力をもって帰還し、15節における現代のパニウムの戦いで勝利を収める。

十七

ラフィアの戦いとパニウムの戦いが、行に行を重ねるかたちで一つに重ね合わされる歴史において、十七年という期間は三度現れる。すなわち、ミラノ勅令により帝国の東西の玉座が婚姻を通して結び合わされてから、三三〇年に王国が分裂し離婚に至るまでの十七年である。この十七年の起点と終点は、他の二つの関連する預言的期間の道標となっている。西暦六四年にネロから始まる迫害の期間が標示され、それは大コンスタンティヌスの時代に終結した。ネロの迫害の時代から、コンスタンティヌスに代表される妥協への移行は、スミルナの教会からペルガモの教会への移行を画定する。三一三年のミラノ勅令はスミルナの教会の終わりを指し示し、十七年期間の終わりである三三〇年は、ダニエル一章二四節の三百六十年の預言の成就であった。

彼は、その州の最も豊かな所にさえ平穩に入り、彼の父祖もその父祖も行わなかったことを行い、彼らの間に獲物と戦利品と富を散らし、さらに、しばらくの間、堅固な要塞に対して自らの計略をめぐらすであろう。ダニエル書 11:24.

313年のミラノ勅令からの十七年間は、ある預言の成就をもって始まり、別の預言の成就において終わる。始まりを画する最初の預言の成就是、スミルナの教会からペルガモの教会への移行を指し示し、その十七年の終わりを画する預言は、ローマ帝国が東ローマと西ローマへ分割されることを指し示す。その十七年は、特定の十七年を定める布告によってではなく、預言的歴史によって画定される。第二の教会と第三の教会との区分のアルファは、360年の時の預言が成就したとき、帝国の東西分裂と符合した。これら二つの預言が十七年の期間を確立するのであり、もし十七が有効な預言的象徴であるならば、その期間は二人または三人の証言に基づいて正当な預言的期間として確証されなければならない。

これらの証人は、紀元前457年に始まる別の二百五十年の期間に存在する。その日にダニエル8章14節の二千三百年の預言が始まった。紀元前457年は預言的な起点であり、確立された預言上の道標である。そこから二百五十年を先へ延ばすと紀元前207年に至るが、これはラフィアとパニウムの戦いの間の歴史である。ラフィアとパニウムの戦いは切り離すことができない。いずれもアンティオコス大王が関与しているからである。紀元前217年のラフィアの戦いから紀元前200年のパニウムの戦いまで十七年である。二千三百年の預言は、冒頭において、第三の勅令がユダの国家主権を回復したときの経緯の変化を画し、終わりにおいては、キリストが聖所から至聖所へと移られたときの経緯の変化を画する。紀元前207年は、ユダヤに対するエジプト支配の経緯から、栄光の地に対するセレウコス

支配の経綸への転換を表す。栄光の地に対するセレウコスの支配の経綸は、紀元前167年のマカベアの反乱を惹起した。

250年に及ぶネロ期はコンスタンティヌス大帝の歴史をもって終わり、二つの戦いのあいだに結末を迎える250年はアンティオコス大王の歴史である。ラフィアの戦いにおいて、プトレマイオス四世はアンティオコス大王を破り、プトレマイオスは十七年間在位した。いずれの250年期にも、明確に特定される十七年の期間が含まれている。いずれも、「大」の称号で知られる支配者の歴史において終わりを迎える。いずれの250年期も、確立された予言的道標において始まり、また確立された予言的道標において終わる。

アメリカ合衆国は1776年7月4日に建国され、その250年後は2026年7月4日に当たる。その日は、アメリカを「偉大に」しようとする者として知られるドナルド・トランプが、その250年を祝う予定である。2026年は、紀元前457年からの250年の場合と同様に、ラフィアとパニウムの現代の戦い、すなわちウクライナ戦争と第三次世界大戦として知られるものの歴史のただ中で結びを迎える。南の王の治世、最初の日曜法の時期、そしてラフィアの戦いからパニウムまでの期間は、同一の預言史に結び付いた3つの17年の期間を与える。3つの250年の期間が同じ預言史において同時に到来する。これら3つの250年の期間は、ドナルド・トランプに関連する歴史とともに、預言的真理の3本の線を確立し、彼はコンスタンティヌス大帝、あるいはアンティオコス大王として表象される。

250年の三本の線は、終末の時代について、互いに異なりながらも相補的な三つの例証を示す。ネロの線は、獣の像の形成に関する預言的特質に完全に合致する、十七年間にわたる妥協の歴史を指し示す。

主は、猶予期間が終わる前に獣の像が形成されることを、私にはっきりと示してください。というのも、それが神の民に対する大いなる試練となり、それによって彼らの永遠の運命が決定されるからである。あなたの立場は矛盾だらけの寄せ集めであり、欺かれる者はごくわずかだろう。

黙示録13章において、この主題は明確に示されている。[黙示録13章11-17節、引用]

これは、神の民が印を受ける前に必ず通らなければならない試練である。神の律法を守り、偽りの安息日を受け入れることを拒むことによって神への忠誠を証明したすべての者は、主なる神エホバの旗印のもとに列し、生ける神の印を受けるであろう。天来の真理を放棄して日曜日の安息日を受け入れる者は、獣の刻印を受けるであろう。Manuscript Releases 第15巻、15。

獣の像とは、教会と国家の結合であって、その関係を教会が支配するかたちのものである。異教とキリスト教の融合を企図したコンスタンティヌスの妥協は、終末の時代における妥協の古典的範例である。

アメリカ合衆国において、教会の制度と慣習に国家の支持を確保しようとする現在進行中の運動において、プロテスタントは教皇派の後を追っている。いやそれどころか、彼らは、教皇制が旧世界で失った至上権を、プロテスタントのアメリカにおいて取り戻すための扉を開いている。そして、この運動にいつそう重大な意味を与えているのは、その主たる目標が日曜遵守の強制にあるという事実である。日曜遵守はローマ

教会に端を発する慣習であり、ローマ教会が自らの權威のしるしであると主張しているものである。世の慣習への同調、神の戒めよりも人間の伝統を敬うという、教皇制の精神がプロテスタント諸教会に浸透し、彼らをして、教皇制が先に行ってきたのと同じ日曜日の神聖視の働きを行うように導いているのである。

読者が、間もなく到来する闘争で用いられる手段を理解したいなら、過去の時代にローマが同じ目的のために用いた手段の記録をたどりさえすればよい。教皇派とプロテスタントが結託して自分たちの教義を退ける者たちにどのように対処するかを知りたいなら、ローマが安息日とその擁護者たちに対して示した精神を見ればよい。

「王の布告、公会議、そして世俗権力により支えられた教会の条例は、異教の祭日がキリスト教世界において栄誉ある地位に達するための階梯であった。日曜遵守を強制する最初の公的措置は、コンスタンティヌスが制定した法令であった。（西暦321年）この勅令は、『太陽の尊き日』に都市住民に休息を命じたが、農村の人々には農業に従事し続けることを許した。それは実質的には異教的な法令であったが、皇帝は自らが名目的にキリスト教を受け入れた後に、これを施行した。」The Great Controversy, 574.

日曜法に至り、また再び日曜法に至らせる妥協の推移は、313年から330年に至る十七年間にによって象徴されており、その歴史の中間点は321年の最初の日曜法である。初めには東西の婚姻があり、終わりには東西の離婚があった。最初の日曜法は反逆を表す中間の道標であり、ちょうど、ヘブライ語のアルファベットの第十三文字が、その前に第一文字を、後に第二十二番目で最後の文字を伴うと、ヘブライ語の「真理」という語を構成するのと同様である。初めの婚姻と終わりの離婚は、アルファの文字がオメガの文字と一致していることを指し示す。ネロに始まる二百五十年の期間はキリストの刻印を帯びており、終わりの時代における現在の真理に関する主題を語っている。

紀元前457年に始まる二百五十年の期間は、ラフィアからパニウムに至る十七年間ににおいて大王アンティオコスが体現した治国術を強調している。これを治国術と理解するのは、紀元前457年に二千三百年の預言もまた開始したからである。その二千三百年は、神の贖いの御業を語る預言の内的系列であり、教会統治術の象徴と符合する。ネロに始まる二百五十年の期間とは異なり、紀元前457年に始まるこの期間は、アメリカを、そして次いで世界を偉大にしようとしつつ、誤謬的なカトリックの「千年に及ぶ平和の黄金時代」という概念を推進する最後のアメリカ大統領の政治的役割を扱っている。

黙示録13章の地の獣である合衆国の二百五十年は、聖書預言における第六の王国の結末を指し示す。それは始まったところで終わる—すなわち、戦争のただ中で。歴史の勝者が、保存される歴史記録を規定する。グローバリストで竜の力を受ける民主党は、現在の無政府状態を革命と見なし、言うばかりで行動しない共和党は、この現在の歴史を内戦と見なす。民主党は聖書預言における竜の代表であり、共和党は背教したプロテスタントとして、すなわちヨハネが黙示録16章で用いる語で言えば、偽預言者として表されている。合衆国は革命戦争のうちに始まり、革命戦争のうちに終わる。共和党は内戦のうちに始まり、内戦のうちに終わる。共和党は、民主党が革命と呼ぶものを内戦と見ている。

最後の共和党大統領であるトランプは、南北戦争の外的歴史において現れた初代共和党大統領の預言的特質を備えている。リンカーンの下での外的な南北戦争はまた、イザヤ書七章八節の預言の内的歴史でもあった。この預言は1863年に終結し、その年こそまさに奴隷解放宣言の年であった。二つの党派の区別は、預言における第一義的かつ根本的な原理である。それはカインとアベルに始まり、キリストの時代にはサドカイ派とパリサイ派によって表象された。彼らは、一人のアベルを殺害するカインの二つの階級であった。

パリサイ派とサドカイ派は、動機は異なれども、合意という点では同じく、自らのメシアを十字架につけることに同意した者たちを象徴している。パリサイ派は律法を擁護すると公言したが、実際にはそうではなかった。共和党の場合も同様である。パリサイ派は本来の神の律法を擁護すると公言しつつも、律法を自らの偏狭な論理によって解釈した。パリサイ派にとっての本来の律法に当たるものが、共和党にとっての合衆国憲法である。彼らはそれを擁護すると主張するが、実際には擁護していない、まさにその憲法である。サドカイ派は神の力を否認し、パリサイ派よりも小さな宗派であったにもかかわらず、キリストの時代にはユダヤの宗教的および政治的状況を掌握していた。民主党は共和党よりも小さな宗派であり、権力にとどまるためには不正に訴えざるを得ないほど小さい。にもかかわらず、彼らはなお権力にとどまっている。万人に対する平等な正義を擁護すると公言する彼らの対抗勢力が、自ら擁護すると公言する法の原則を執行するために何らの措置も講じないからである。

日の下には新しいものはない。アメリカ合衆国の二大政党は、パリサイ人とサドカイ人がそうであったのと同様に、預言的構図の一部をなしている。もちろん、この預言的な系譜に沿って他にも多くの類比があるが、互いに敵対しながらも聖なるものに対しては一致する、この二つの聖ならざる権勢の預言的関係を見てはじめて、プトレマイオスとウジヤを然るべき光のもとに見ることができる。いずれの南の王も同じ神殿でいけにえを献げようとしたが、エジプト出のプトレマイオスは、竜の勢力、すなわち民主党を表す。ユダヤの王としてのウジヤは栄光の地の指導者であり、背教したプロテスタンティズム、すなわち偽預言者である共和党に当たる。

竜と偽預言者の関係は、典型的にはカルメル山において表象されている。そこにおいて、アハブは竜を表し、イゼベルのもとにあるバアルとアシュタロテの預言者たちは、エリヤに敵対して立った偽預言者を表した。獣であるイゼベルは、なおサマリアで背後に控えていた。偽預言者と結合した竜は、十字架においてなされた異教ローマとユダヤ人の連合によっても表されており、同様に、日曜法の際における民主党と共和党の連合によっても表されるであろう。連合した権力の諸要素は、地の獣の共和政の角のうちにある民主党と共和党によって表象されている。その二つの不聖なる政治権力はカインによって表され、アベルの系統もまた二重の分岐を有している。

カインの外的な系統に対する内的な系統であるアベルの系統は、二つの処女の類型によって表象される。地から上ってくる獣であるアメリカ合衆国におけるプロテスタントの角の展開は、アメリカ合衆国が聖書の預言における第六の王国となった1798年に、サルディスの教会から始まった一連の宗教的粛清によって表象されている。サルディスは、生きていたという名を持ちながら、実は死んでいた教会であった。1798年までには、教皇教会から離脱したプロテスタント諸派は、すでにローマへの回帰を始

めていた。キリスト者は初めてアンティオキアでキリスト者と呼ばれた。

弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれたのはアンティオキアであった。その名が彼らに与えられたのは、キリストが彼らの説教と教え、そして会話の中心的主題であったからである。彼らは、主の地上での奉仕の日々、すなわち弟子たちが主のご臨在の恵みにあずかっていた時に起こった出来事を、絶えず繰り返し語っていた。彼らは飽くことなく、主の教えと癒しの奇跡について語り続けた。彼らは唇を震わせ、目に涙を浮かべながら、園での苦悶、裏切り、裁判、そして処刑のこと、敵から加えられた侮辱と拷問にどれほどの忍耐とへりくだりをもって耐えられたか、さらにご自身を迫害する者たちのために祈られた神のごときあわれみについて語った。主の復活と昇天、そして墮落した人間のための仲保者として天において行っておられる働きは、彼らが喜んで思いを注いで語り続けた主題であった。彼らがキリストを宣べ伝え、またキリストを通して神に祈りをささげていたのだから、異教の人々が彼らをキリスト者と呼んだのももっともであった。

彼らにキリスト者という名を与えられたのは神であった。これは高貴な名であり、キリストに連なるすべての者に与えられる。この名について、のちにヤコブはこう書いた。「富む者たちはあなたがたを虐げ、法廷に引き立てはしないか。彼らは、あなたがたがその名によって呼ばれているあの尊い名を、冒瀆してはいないか。」ヤコブの手紙 2:6, 7。またペテロはこう宣言した。「もし誰かがキリスト者として苦しむなら、その人は恥じてはならない。むしろ、このことについて神をあがめなさい。」「もしあなたがたがキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いである。というのは、栄光の御霊、すなわち神の御霊があなたがたの上にとどまっているからである。」第一ペテロ 4:16, 14。使徒行伝、157。

エペソの教会は「キリスト者」の名を与えられ、これが迫害のスマルナの教会へとつながり、その後には、ペルガモの歴史における妥協の教会が続いた。教皇制が王座に就いたとき、分離が生じ、神の真の教会は「荒野の教会」として区別された。ローマの教会はテアテラであった。千二百六十年に及ぶ荒野の期間の終わりに、プロテスタンティズムの教会が興り、その時点以後、プロテスタントの角は、神的一連の試練と浄化によって象徴される。

プロテスタント主義は、1517年、マルティン・ルターが九十五箇条の提題を扉に釘で打ち付けた時に始まり、その「23」年後に当たる1540年にはイエズス会が創設された。2013年には、ハバククの表の第95番目にして最後の掲示が扉に釘で打ち付けられ、同年3月13日には、初のイエズス会士の教皇が即位した。まさにその歴史の中で、マルティン・ルターは教皇レオによって破門された。推して知るべし……。

1798年、サルデスの教会は自らを「プロテスタント」という名に堅く立つ者であると称したが、ローマへの回帰によって、すでにその名を守り通してはいなかった。1844年にミラー派アドベンティズムがプロテスタンティズムの松明を受け継いだとき、彼らは、神がご自身の宮を置かれたユダの部族と血を分けた同族から成る国民イスラエルの初代の王ヤロブアムに対する譴責を表した。ヤロブアムは、自国のかつての隷属を表す宗教に基づく偽りのものを据えた。彼は、獣の像を築くというアロンの根源的反逆を、その物語に結びつくすべての預言的意義をも含めて、繰り返した。だが、彼の奉献式において、ミラ

一派アドベンティズムは、真の礼拝を神が住まわれる聖所へと向け続けるように導くことを彼が拒む姿勢を譴責した。ヤロブアムは、礼拝の焦点がベテルとダンに置かれることを望んだが、これは、1844年にサルデスにあってキリストに従って至聖所に入ることを拒んだ者たちを表していた。

ミラー派アドベンティズムはローマの宗教へ回帰することを選び、ミラーのメッセージを拒否したことによって偽預言者であることを露わにされたばかりの者たちの、まさにその教理的論証を、自らの神学上の師として仰ぎ採用した。これは、「七つの時」という預言的メッセージを自ら拒絶することを正当化するためであった。不従順な預言者と同様に、ミラー派アドベンティズムは、神の導きに従うのではなく、自らの道を選んだ。預言史において宗教改革以降になされた、賢いおとめと愚かなおとめのすべての試練とふるい分けにおいて、愚かな者が選ぶ道は、かつてあなたが救い出された地へと立ち返り、その地での礼拝に戻る道である。そして言われるとおり、「すべての道はローマに通ず」。ただし、エレミヤの言う「いにしえの道」だけは例外である。

プロテスタント宗教改革は、神の民を約束の地へ導くためにモーセがエジプトへ戻った出来事によって予型示されていた。隷属の地を出たのち、神はご自身の選民にご自身の律法をお与えになることを御旨とされた。モーセの時代とプロテスタント宗教改革の系譜においては、解放の直後に背教が顕わになった。神は、サルデス、すなわち生きている名を有すると称しながら、ウィリアム・ミラーのメッセージの時には死んでいた民を、試みられた。1844年に二度のふるい分けが起こった。第一は、自らをプロテスタントと称しつつも、死んでいることが明らかにされたサルデスの教会のふるい分けであり、そして同年、十人の乙女のたとえの成就として、ミラー派もまたふるい分けられた。

民主党と共和党は、黙示録十三章の地の獣における共和主義の角を構成する二つの政治的階級を表している。賢いおとめたちと愚かなおとめたちは、地の獣におけるプロテスタントの角を構成する二つの宗教的階級である。賢いおとめたちは、アンティオキアで与えられた最初の名を有している。賢いおとめたちはキリスト者であるが、同時に、名を受けるとの約束を持つフィラデルフィアの者たちでもある。

勝利を得る者を、わたしはわたしの神の神殿において柱とする。彼はもはやそこから出ることはない。また、わたしは彼の上に、わたしの神の名と、わたしの神の都の名、すなわち天から、わたしの神のもとから下ってくる新しいエルサレムの名を書き記す。また、わたしの新しい名を彼の上に書き記す。ヨハネの黙示録 3章12節

神がご自身の民を初めて「キリスト者」と名づけられたのはアンティオキアにおいてであり、また、十四万四千人に関わるラオデキアの運動が同じく十四万四千人に関わるフィラデルフィアの運動へと移行する歴史は、アンティオキアという都市の名の由来となったアンティオコス大王、すなわちラフィアとパニウムの戦いの間の二百五十年の期間の終末において表象される者の歴史でもある。

これらの内容は次回の記事で続けます。